

# 丹下左膳の最期

— 映画「新版大岡政談解決篇」に見られる舞台作の影響 —

## 二、『新版大岡政談』とは

『新版大岡政談』は、昭和二年（一九二七）十月十五日から、昭和三年五月三十一日まで、大阪毎日新聞紙上に連載された。作者は林不忘の名で鬚物まげものを、牧逸馬の名で家庭小説を、谷譲次の名で渡米体験に基づく紀行文を執筆したことで知られる長谷川海太郎である。物語は、二振りの名刀を巡る正邪入り乱れての争奪戦を中心に展開する。刀を狙う隻眼隻手の剣豪丹下左膳は悪役でありながら読者の注目を集めた。

新聞連載が人気となると、大衆小説の映画化の流行と相まって『新版大岡政談』は、一気に知名度を増すこととなる。東亜キネマ、マキノプロダクション、日活映画といった大手三社が同時に映画化にのりだしたので。いずれの会社も丹下左膳役に主演俳優を起用した。なかでも日活の伊藤大輔監督、大河内伝次郎主演による「新版大岡政談」は傑作の誉れ高く、その解決篇はキネマ旬報ベストテンの第三位にランクインしている。

こうして丹下左膳は『新版大岡政談』の代名詞的存在として定着した。すると今度は、丹下左膳をタイトルロールに据えた小説が新たに作りだされた。それが同じ作者の手になる『新講談 丹下左膳』である。この作品は、昭和八年（一九三三）六月七日から、昭和八年十一月五日まで東京日日、大阪毎日新聞、途中中断を経て昭和九年（一九三四）一月三十日から、昭和九年九月二十日の最終回までが読売新聞にて連載された。丹下左膳がこれほど大衆受けしたのは、映画化に拠るところが大きい。娯楽の王道である映画が、『新版大岡政談』の興行的価値に気づき、大々的に取り上げたことにより知名度が飛躍的に向上したのである。

## 一、はじめに

林不忘の時代小説『新版大岡政談鈴川源十郎』（※以降『新版大岡政談』と略記）は、昭和三年（一九二八）に映画化されたことで爆発的な人気を博し、一気にその知名度を上げた。物語の登場人物丹下左膳は、時代劇界の寵児として今もなおその名を轟かせている。

この『新版大岡政談』は映画化される以前に、新声劇と関西歌舞伎によって舞台化されたことが知られている。本稿は丹下左膳の「最期」の描かれ方に着目し、新声劇と関西歌舞伎の「新版大岡政談」が、日活映画「新版大岡政談 解決篇」に及ぼした影響を考察する。

小説『新版大岡政談』のあらすじを紹介する。

江戸は根津にある、神変夢想流小野塚鉄齋道場に伝わる名刀乾雲丸と坤龍丸。関孫六が最期に作ったこの刀には不思議な力が宿り、夜泣きの刀と呼ばれている。同じ所に納まっている間は平穩無事だが、一度離れ離れになると再び二刀が一つになるまで何人も血を見るという。そして刀が互いを求めて夜泣きをするという。奥州中村六万石の藩主相馬大膳亮は無類の刀好き、乾雲丸、坤龍丸を何としても入手すべく、家中でも特に剣の優れた武士に刀を奪い取るよう秘命を下した。

小野塚道場では秋恒例の試合が催されていた。但し今度の試合の勝者には、鉄齋の一人娘弥生を呈するというのである。弥生は優勝候補の高弟、諏訪栄三郎に好意を寄せていた。ところが御書院番大久保藤次郎の弟諏訪栄三郎は、かねてから水茶屋の娘お艶を好いており、恋人お艶の為にわざと負けを取る。試合が決する頃隻眼隻手の道場荒し丹下左膳が現れ、小野塚鉄齋は殺され乾雲丸が奪われる。乾雲丸を取り返すため妖刀の導きを信じ、諏訪栄三郎は坤龍丸を腰に丹下左膳を捜索する。

本所法恩寺前に住まう不良旗本鈴川源十郎は、蔵前の札差へ金策に行くがものにならない。同じ店先で大枚五十両を借り出した若侍に目をつけ、小悪党の鼓の与吉にその金を巻き上げるよう命じる。しかし大岡越前守の旧友で乞食の豪傑、蒲生泰軒に阻まれる。

栄三郎の情婦お艶に横恋慕する鈴川源十郎は、この恋敵こそ食客丹下左膳が血眼で探している諏訪栄三郎であると知り、その居場所を左膳に知らせる。栄三郎に奇襲を仕掛ける左膳であったが、左膳に一方的な好意を寄せている櫛巻お藤のために取り逃がしてしまう。

お藤は、愛する左膳が小野塚弥生に片思いしている事を知り嫉妬する。その腹癒せに、弥生をわざと誘い出しお艶栄三郎が同棲生活を送る瓦町の長屋へ連れ込んだ。また、妖刀に魅入れられ夜毎辻斬りを働く丹下左膳の居所を密かに役人へ訴入するのであった。

栄三郎とお艶の仲を知り自殺を図ろうとした小野塚弥生は、火事装束に身を固めた謎の五人組に救われる。五人の正体は関孫六の子孫、刀鍛冶得印兼光とその門弟等であった。兼光の目的は、乾雲丸と坤龍丸に秘められた関孫六の秘文状を回収することであった。弥生は男装し小野塚伊織と名乗り、手先を雇い左膳一味を襲う。一方で弥生に義理を感じたお艶は栄三郎の元を去り、深川で羽織芸者となるのであった。

栄三郎に蒲生泰軒という後ろ盾があり、一人で坤龍丸を奪うのは難しいと考えた左膳、相馬から援軍を呼び寄せた。ある晩、諏訪栄三郎と蒲生泰軒は丹下一味が拠点とする鈴川屋敷へ夜討ちを仕掛ける。そこへ兼光率いる五人組も乱入。兼光達は首尾よく手に入れた乾雲丸、坤龍丸の中から秘文状を回収する。その後、夜泣きの刀と弥生は左膳の手に落ちる。目的を果たした丹下一味は海路で相馬を目指すが、後を追ってきた栄三郎にことごとく討ち取られてしまう。末期の肺病であった弥生は、栄三郎に夜泣きの刀を託して息を引き取る。一人生き延びた丹下左膳は君命を全うできず、筏に身をゆだねて金華山沖の波間へと姿を消すのであった。

鈴川源十郎は、金欲しさに行った辻斬りが露見し御用となった。羽織芸者の足を洗い、江戸で栄三郎の帰りを待つお艶。彼女の亡父は、同役の連座で浪人したが左膳と同じ相馬藩の家臣で、賄頭を勤めた人であった。栄三郎と婚禮を挙げたあかつきには、乾雲丸と坤

龍丸を手柄に相馬藩へ帰参するつもりである。

以上が『新版大岡政談』のあらすじである。物語の柱は、善悪の構図がはっきりとした刀の争奪戦である。(※巻末「資料一」参照) 坤龍丸を持つ善玉諏訪栄三郎と、乾雲丸を持つ悪玉丹下左膳が互いの刀を求めてぶつかりあう。そしてそこに、お艶を求めて奔走する鈴川源十郎や、儘ならぬ恋愛関係が組み合わされることで嫉妬や策略を生みだし、物語をより一層波乱に満ちたものにしていく。

### 三、『新版大岡政談』の舞台化

大正末期から昭和初期にかけての映画業界は、大衆向け新聞小説を原作とした、連続時代劇の全盛期であった。その一方で演劇業界でもまた、新派、新劇などの新興演劇を中心にそういった新聞劇(新聞小説を劇化したもの)が演じられた。競作映画として知られる「修羅八荒」「孔雀の光」「鳴門秘帖」「砂絵呪縛」の四作について調査したところ、これらは映画化のみならず舞台上演もされている。(※巻末「資料二」参照) 『新版大岡政談』も多聞に漏れず新聞劇として舞台化されたのである。

大阪時事新報(昭和三年一月三十一日付二面)をみると、「浪花座の歌舞伎と角座の新声劇で上場競演される大阪毎日新聞連載の新版大岡政談劇其他名狂言揃」と見出しをつけて舞台「新版大岡政談」の広告が載っている。広告によると浪花座が二月初日、角座が二月一日初日とあるので、新声劇こそ初めて舞台上で「新版大岡政談」を上演した劇団ということになる。

新声劇の「新版大岡政談」は、昭和三年二月一日初日の大阪道頓堀角座興行にて、番組二本立ての内、二番目の出し物として初演された。基

本情報には以下の通りである。

#### ●角座版「新版大岡政談」

五幕十三場 新聞劇／「脚本作者」食満南北

「名称」新版大岡政談の内鈴川源十郎の巻

「初演」昭和三年二月一日～二月二十日、角座 「上演団体」新声劇

「初演時配役」

鍛治屋富五郎・伊吹大作(山木之彦)、当り矢のお艶(和歌浦糸子)、鈴川源十郎(芝田新)、つゞみの与吉・近侍笠原宮内(一條新三郎)、蒲生泰軒(伊川八郎)、諏訪栄三郎(辻野良一)、丹下左膳(中田正造)、門弟猿島健太・相馬大膳亮(堀正夫)、櫛巻のお藤(富士野蔦枝)、大久保藤次郎(名越仙左衛門)、小野塚鉄斎(鈴木黙堂)、小野塚の娘弥生(金剛麗子)、森徹馬・將軍徳川吉宗(小波若郎)、土屋多門(新田吉里)、お艶の母おさよ(中村仲次)、大岡越前守忠相(藤本正雄)、侍女皐月(吉野静江)、隣家の女房おこと・侍女卯の花(若柳蔦子)、侍女呉竹(濱地良子)

「場割」

序 幕 水茶屋当り矢の場  
同返し 小野塚邸稻荷祠前の場  
同返し 川端首尾の松の場  
二幕目 大岡越前守私宅の場  
同返し 同門外の場  
同返し 化物屋敷の場  
三幕目 浅草瓦町お艶住居の場  
同返し 同 露次口の場  
同返し 再びお艶住居の場

同返し 小塚ヶ原の場

四幕目 將軍吉宗の居間の場

同返し 城外濠端の場

大詰 芝山内の場

〔上演記録〕

・昭和三年二月一日～二月二十日、大阪道頓堀 角座（新声劇）

・昭和三年三月一日～三月十八日、京都新京極 京都座（新声劇）

・昭和三年四月一日～四月八日、神戸楠公前 八千代座（新声劇）

脚本を担当した食満南北（一八八〇～一九五七）は、松竹土地興行会社に所属し、関西歌舞伎の為に多くの脚本を執筆した劇作家である。代表作には「ぬれごろも」「恋の三位」「大政奉還後の慶喜」等がある。

食満南北の「新版大岡政談」（※以降「食満版」と表記）は、田中照禾『資料による丹下左膳の研究』（私家版 平成二十四年 資料媒体DVD-ROMファイル名「資料による丹下左膳の研究第五巻 演劇・ドラマ

篇」国立国会図書館電子資料室所蔵。資料請求記号：YH33-L162

三二九頁～三七五頁）に脚本影印が採録されている他、京都座（昭和三年三月一日初日）上演時の梗概が、京都日出新聞（昭和三年三月二日付夕刊三面）の「読者と演芸」欄に掲載されている。

食満版の脚本を読むと三幕目の「浅草瓦町お艶侘住居の場」の冒頭辺りまでは、かなり原作に忠実な筋の運びであることがわかる。新聞の読者に歓迎されたことであろう。脚色者の独創性は、三幕目の「再びお艶侘住居の場」以降に強く覗える。四幕目の「將軍吉宗の居間の場」「城外濠端の場」、大詰「芝山内の場」は原作に該当箇所は存在しない。この辺りは、南北の手腕が光る脚本オリジナルの展開なのである。

一方で浪花座の「新版大岡政談」というと、関西歌舞伎の四代目片

岡我童（十二代目片岡仁左衛門）、四代目中村福助（三代目中村梅玉）、三代目阪東寿三郎等の一座によって演じられた。昭和三年二月三日初日の浪花座興行にて、昼の部の四本立ての番組中一番目の出し物として初演された。以下に基本情報を記す。

●浪花座版「新版大岡政談」

二幕五場 新聞劇／「脚本作者」鳥江鉄也

〔名称〕大岡政談「鈴川源十郎の巻」

〔初演〕昭和三年二月三日～二月二十四日、浪花座

〔上演団体〕関西歌舞伎

〔初演時配役〕

旗本次男 諏訪栄三郎（片岡我童）、剣客丹下左膳（阪東寿三郎）、

凶状持の女櫛巻のお藤（中村霞仙）、小野塚鉄斎の娘弥生（中村福太郎）、

つゞみの与吉（実川延五郎）、甲州浪人蒲生泰軒（嵐橋三郎）、

旗本鈴川源十郎（浅尾大吉）、水茶屋の娘お艶（中村成太郎）、

用人伊吹大作（中村政治郎）、江戸町奉行大岡越前守（中村福助）

〔場割〕

第一幕（一）法恩寺前鈴川源十郎屋敷

（二）御藏渡し付近の川端

（三）瓦町の露地栄三郎の侘住居

第二幕（一）上野穴稻荷初午祭り

（二）同 穴稻荷社殿の裏手

〔上演記録〕

・昭和三年二月三日～二月二十四日、大阪道頓堀 浪花座（歌舞伎）

・昭和三年七月三日～七月十三日、東京浅草公園 昭和座

（尾上多見太郎・酒井淳之助・大谷友三郎合同劇）

・昭和四年一月十四日～二月二十五日、東京本所緑町 寿座（歌舞伎）浪花座の「新版大岡政談」は当時の新進脚本家、鳥江鉄也によって脚色された。鳥江鉄也は、松竹合名社に所属した劇作家で、関西劇界の情報を知る上で最も有力とされる演芸雑誌『道頓堀』にも、編集者兼発行者として名を連ねた。

鳥江鉄也の「新版大岡政談」（※以降「鳥江版」と表記）は、浪花座上演脚本が『道頓堀（第三年第十七集）』（昭和三年二月一日発行 松竹合名社内 道頓堀編集部）の一〇二頁から一三四頁に掲載されている。二幕五場と短めの劇ではあるが、夜泣きの刀の奪い合いを前面に押し出すのではなく、諏訪栄三郎という一人の男性を愛してしまってお艶と弥生の葛藤を主題として、傍観者榎巻お藤を狂言回しに洗練された構成となっている。剣劇一座の新声劇に向うを張る出し物として、『新版大岡政談』の剣劇以外の要素を掘み出し、歌舞伎で上演することを前提に世話物風に脚色されたことが伝わってくる。因みに、この鳥江版脚本には雑誌掲載されたものとは別に筆写本が存在する。その件に関しては、後の章で語ることにする。

さて、角座と浪花座の両座に競演され、話題となった『新版大岡政談』は、続いて映画産業に迎えられることとなる。『新版大岡政談』が東亜キネマ、マキノプロダクション、日活映画の三社により映画化されたことはすでに述べた。

映画「新版大岡政談」の第一篇は各社とも昭和三年五月に封切られた。映画化の企画が何時持ち上がったのかは不明であるが、撮影開始前の三社の動きは以下の通りである。

まず東亜キネマは、『キネマ旬報（二八九号）』（昭和三年三月十一日発行 七十二頁）日本各社撮影所通信欄の「東亜京都通信 二月二十九

日調査」の項に、「広瀬五郎氏は大毎（※引用者註、大阪毎日新聞の略称）連載中なる林不忘氏原作を竹井諒氏が脚色せし「新版大岡政談」（鈴木源十郎篇）の監督を近日より開始する筈」とある。マキノプロダクションは、『キネマ旬報（二九〇号）』（昭和三年三月二十一日発行 六十九頁）「マキノ御室通信 三月十一日調査」の項に「二川文太郎氏は既報「刀を抜いて」を中止して、近日より、大毎連載中の「新版大岡政談」（鈴木源十郎篇）を山上伊太郎氏が脚色せしものを監督する事に決定し目下準備中である。」となっている。そして日活はというと、『キネマ旬報（二九一号）』（昭和三年四月一日発行 八十五頁）「日活大秦通信 三月二十一日調査」の項に「伊藤大輔氏は既報の如く大毎連載中の「新版大岡政談」を制作する事に決定し、目下氏自身脚色中であるが脱稿次第監督に着手する筈である。」と記載されている。各記事の調査日に注目すると、大阪道頓堀の角座、浪花座に舞台「新版大岡政談」が掛かっていた時期には、いずれの会社も撮影に至っていないことが分かる。各社の映画製作状況の詳細については、巻末資料（三）『新版大岡政談』年表』を参照されたい。

映画「新版大岡政談」は三社の何れの作品もフィルムが現存しない。しかし幸いに、キネマ旬報ベストテン入りを果たした日活映画「新版大岡政談」に関しては、幻の傑作として多くの好事家が記録を残した。この様な先行研究から、映画の筋立は概ね知ることが出来る。よって本稿は特に日活作品「新版大岡政談」と舞台の関係を探ることとする。

#### 四、劇作家が描く左膳の最期

小説『新版大岡政談』の最後を読むと、丹下左膳は諏訪栄三郎と海上

で対決し、追い詰められ以下の様になる。

涙をぬぐつた栄三郎が、泰軒の指す方を見やると、はるか暗い浪の  
あひだに、船板をいかに組んで、丹下左膳の長身が、生けるとも  
死んでもなく、遠く遠く漂ひ去りつゝあつた。

(第一九六回 昭和三年五月三十日付夕刊三面)

この様に、小説『新版大岡政談』は丹下左膳に留めを刺すこと無く終  
わりを迎える。ところが、『新版大岡政談』連載終了後の八月十七日に  
封切られた日活映画「新版大岡政談 解決篇」では、物語のラストが原  
作とは大きく異なる上、丹下左膳が壮絶な自決を果たすのである。伊藤  
大輔監督は何故丹下左膳を殺してしまったのか。そのヒントは、先行す  
る舞台「新版大岡政談」での丹下左膳の扱いにあると考える。なぜなら、  
舞台「新版大岡政談」では、食満版、鳥江版共に大詰めで丹下左膳が死  
ぬからである。

舞台「新版大岡政談」が初演されたのは昭和三年二月であり、その頃  
林不忘の原作は、まだ終わりの見えない連載途中であった。渡邊均  
「大岡政談」の作者林不忘氏の外遊を車中に見送る」(『サンデー毎日  
(七巻十八号)』昭和三年四月十五日発行 十三頁)は、対話形式の記事  
である。この中で記者と林不忘が舞台「新版大岡政談」について語って  
いる。林不忘は大阪での両座の芝居を見ていないと述べており、どちら  
の評判が良かったかを記者の渡邊均に尋ねている。(※話者は引用者が  
付した。)

記者「さうですね。両方とも、まるで行き方を違へてあるので、ど

つちがどつちともいへませんけど、やつぱり新聞の読者で全  
体の筋やら葛藤やらを見たい人は、幕の数が多いだけでも、  
角座の方を喜んだかも知れませんね。」

不忘「さうでせうね。私も台本だけは見せてもらいましたが、食満  
南北氏なんて、うまいものですね。」

記者「手に入ったもんですね。」

不忘「私の小説があんなにもなるものかと思ふと、やつぱり、さす  
がだなと思ひました。」

この会話から、林不忘が舞台「新版大岡政談」の仕上がりをそれなり  
に評価していることが覗える。恐らく芝居の関係者からは、今後の小説  
の展開について踏み込んだ質問がなされなかったのではないだろうか。  
まだ連載中で結末を書いていない自分の小説を、第三者である劇作家が  
一つの作品としてまとめたことに、原作者は純粹に感心しているよう  
である。更に『サンデー毎日』では、

記者「——それはさうと、今度あの大岡政談を活動にとる映画会社

の方から、あの筋はこれからどういふ風になるのかといふや  
うなことを尋ねて行つたでせう？」

不忘「江、お艶はどうなるんだとか、源十郎はどうするんだとか  
尋ねて来ました。しかし、あんなことをたづねられるのは困  
りますね。」

と述べており、映画化の際には原作者が困惑するほど筋に対する詮索が  
行われたようだ。

舞台「新版大岡政談」を担当した脚本家たちは、連載中の小説を劇化するため、途中までは原作を基に話を進めて、大詰めへ向けての筋立てを自身で創作する必要があった。そこで、舞台「新版大岡政談」がどの様に物語を終わらせるのか。丹下左膳は、どの様な経緯で死んでゆくのかを見て行きたい。

#### ・食満版「新版大岡政談」の最期

食満版が風雲急を告げるのは、三幕目の「小塚ヶ原の場」からである。以下、田中照禾『資料による丹下左膳の研究』所載の食満南北脚本影印に基づき三幕目以降の粗筋を記す。

悪旗本鈴木源十郎は賄婆として雇っているおさよが、お艶の実母であると看破していた。刀で脅し、お艶の居所を白状させようと迫るが、存せぬの一点張り。遂におさよを殺してしまう。源十郎は役人に捕われる。乾雲丸を持つ丹下左膳が頻繁に辻斬りを行った結果、左利きの辻斬りは江戸中の恐怖の的となり、下手人を挙げる為に大岡越前守が動き出した。

刀を求め辻斬りを行う丹下左膳の背後に、相馬大膳亮が関与することを知った越前守は、將軍吉宗に願ひ出て相馬大膳亮を召喚する。越前守は吉宗の御前に於いて「御家臣のうちに丹下左膳と申す者隻眼隻手の者お心当りがござりませうや」と相馬公を問いたす。その男は名刀を望み小野塚鉄斎を斬り、乾雲丸という刀を奪い無辜の辻斬りを行っているという。丹下左膳の潜伏先の主鈴木源十郎を捕えて詮議したところ、嘘とは思われるが相馬公の名が挙がったのだと述べる。大膳亮は関与を否定し、名刀を好まぬことはないが、盗人を遣わし奪い取るなどあり得ないと返答する。越前守は、左膳召し捕りに異存が無いが大膳亮に念を押す。大膳亮は「念には及ばぬ、

吾等に何のかゝり合ひもござらぬ」と答え、その場を切り抜ける。

呼び出しの帰路、城外濠端において、丹下左膳が大膳亮の乗り物に近寄ってくる。「アツ我君」と声を掛ける左膳に対し、「イヤ、何者ぢや、予は相馬大膳亮其方如きは一向に見覚えがないぞ」とあくまで他人を装った上で、大膳亮は城中における越前守との対話を云って聞かせる。刀を集め府内を騒がせる辻斬りの下手人が、相馬藩の者であるという噂。事実であれば、奥州中村六万石はお取りつぶしにあうという。「サア、そな者何事も察してくれい」という主君の言葉に状況を理解した左膳は、「ハッ、さては相馬の殿にござりましたか浪人者のいたづらが却って御名まで出ましては…何事も心得るでござりませう」と、身一つでこの件の責任を引受ける覚悟を示すのであった。

大詰「芝山内の場」に於いて、破れかぶれの丹下左膳は、片恋の相手小野塚弥生の駕籠を襲撃する。共に奥州へ行こうと誘う左膳に、弥生は「父の仇、刀の盗賊、たとひ此の身は八ツ裂きにされましてもあなたに随ふとは思ひませぬ」と拒絶する。左膳は強引に弥生を得ようとするが榎巻お藤によって阻まれ、遂にお藤を殺してしまう。駆け付けた諏訪栄三郎は弥生に助太刀をするが、斬り結ぶ左膳にこれまで程の覇気が無い。栄三郎に肩先を斬られた左膳は突然弥生の手を取り、その短刀で自らの脇腹を突かせた。左膳は栄三郎に乾雲丸を差しだし、坤龍丸と併せて栄三郎の手で、相馬大膳亮へ献上するよう懇願する。しかし、落ちぶれても直参の意地がある諏訪栄三郎は、出来ぬ相談だと断る。希望が潰えた丹下左膳は「かなわぬか、今生の望みもかなわぬか、不忠、不義の丹下左膳サア弥生殿、せめてお身の手で死のう」と弥生に身を任せる。しかし、病魔に侵

された弥生には、左膳に留めを刺す余力も無く、栄三郎に看取られ満足の内息を引き取るのであった。

左膳の願いを受け入れようとしぬい栄三郎に対して、その場に現れた大岡越前守は、お艶と二人で和田家を再興するよう諭す。栄三郎は兄に勘当を許され、弥生の叔父土屋多門によって、正式に夜泣きの刀を譲りうける。栄三郎は刀を携えて、お艶と共に相馬へ向かう決心をする。苦しい息の下で安堵した左膳は、「忝けない、それでこそ相馬の殿も立つ、丹下の生命も無駄ではなかつたのう、ハ……」と淋しく笑い死んでいくのであった。

このように食満版の丹下左膳は、あくまでも君命を全うする忠臣として描かれた。彼が如何に忠誠心の強い人間であるかは、第二幕「化物屋敷の場」での「刀といふ刀を集むるが相馬殿の、この世の望み、秘命をうけて江戸へ登つたこの左膳、主命ぢや、忠のためぢや、たのまれた武辺の意地ぢや、女にさまたげられて武士が立つか、忠の道がつくされるか、主命が全うされると思ふか」という台詞から滲み出ている。これは、榊巻お藤の横槍で栄三郎から坤龍丸を奪い損ねた左膳がお藤を責めながら述べた台詞である。

左膳一人を見限れば、相馬中村六万石との関わり合いを不問にする姿勢を示した越前守に、大膳亮は従うより他選択の余地が無い。忠義一途な丹下左膳は、主君の頼みを聞き一介の素浪人として死んでいくことを受け入れる。また、左膳最期の奉公は大岡越前守によって成就され、相馬大膳亮は結果的に夜泣きの刀を入手することが出来るのである。我が身を省みず忠君の姿勢を貫く家臣こそ、食満版丹下左膳の最期の姿である。

一方で、まったく方向性を異にするのが鳥江版である。こちらの丹下

左膳は君命にも勝る小野塚弥生の心を得て、満足の内息に死んでいく。

#### ・鳥江版「新版大岡政談」の最期

鳥江版が原作の筋を離れるのは、第一幕の「瓦町の露地栄三郎の侘居の場」の終盤からである。以下、『道頓堀（第三年十七集）』所載の鳥江鉄也脚本に基づき粗筋を紹介する。

丹下左膳に袖にされた榊巻お藤は、左膳の片恋の相手小野塚弥生に激しく嫉妬する。その腹いせに栄三郎とお艶が暮らす瓦町の家へと弥生を連れ込んだ。二人の仲を見せつけて、弥生の心を掻き乱そうという心算なのである。

恋敵である弥生の突然の訪問に、お艶は素気無い態度を示すが、お藤の思惑と異なり武家娘の弥生はお艶を前にしても、激情に走ることはなかった。弥生は栄三郎を思うあまり病となってしまったこと、今は栄三郎を諦めていることをお艶に打ち明け、父の敵と乾雲丸奪還をくれぐれも頼むと栄三郎に伝えて欲しいとだけ言葉を残し、帰りかける。弥生の言葉に自分の態度を悔いたお艶は、弥生に栄三郎を譲る決意をする。譲り合う二人の前に現れた諏訪栄三郎は恋のジレンマに苦しみ、大刀武蔵太郎を抜き放ち空を斬る。愛するお艶との絆を断ち切ったのである。

栄三郎宅での出来事から一月が過ぎた。丹下左膳と小野塚弥生は上野穴稻荷の初午祭りを訪れていた。一ヶ月前の夜、栄三郎宅からの帰り道、大川へ身投げを計った弥生は丹下左膳に救われていたのである。二人は、同じく穴稻荷に参詣する鈴川源十郎の一行と出くわすが、そこにはお艶の姿があった。

再会したお艶と弥生は、互いの教奇な運命を語り合う。お艶は、栄三郎と別れた後お藤の元に身を寄せていたが、鈴川源十郎の力で



左膳から乾雲丸を取り戻そうと考え、源十郎になびくと見せかけ今夜から鈴川の屋敷へ入りこむ覚悟であるという。一方、父の敵に命を救われた弥生は、隙あらば左膳を討ち取る覚悟を決めて、心ならずも向島の小梅と共に暮らしてきたのだという。ところが、思わぬ左膳の優しさに彼女の覚悟は揺らいでいた。「一日／＼と暮すうち、情けがかゝつて、あの人を今では討つ気にもなれません」という弥生は、栄三郎の手にかかって死ぬことを望むのであった。

時同じく、穴稻荷にお忍びでやって来た大岡越前守は、伊勢山田奉行時代の旧友蒲生泰軒と出会う。反徳川の思想を持つ泰軒は、徳川の治世を痛罵するのであった。悪旗本鈴川源十郎の罪状、また世間を騒がせる辻斬り丹下左膳の正体すらも既に突き止めている越前守に、泰軒は源十郎と左膳が此の穴稻荷に居ることを告げて去っていく。

丹下左膳に文使いを頼まれたつゞみの与吉は、栄三郎の懐中へ手紙を捻じ込むが、栄三郎は越前守とぶつかった拍子にそれを落としてしまう。手紙を入手した越前守は、用人大作に命じ捕方の手配をするのであった。

上野穴稻荷社殿の裏手、捕方を逃れてやってきた丹下左膳は、諏訪栄三郎と出くわし対決となる。駆け付けた弥生は、栄三郎に自分を斬る様懇願し両者の間から退こうとしない。左膳は許しを乞いながら、弥生を斬った。また左膳も栄三郎の刃に倒れる。左膳は今宵栄三郎に討たれる覚悟で、自分の正体と相馬大膳亮とに関わる密事を、手紙にしたため与吉に持たせていたのだ。瀕死の弥生は栄三郎に夜泣きの刀を託し、相馬へ行きお艶と夫婦に成るよう願った。弥生と出会い真剣の恋を知った左膳は「栄三郎、相馬の殿より丹下左

膳の行方を聞かれたら左膳は江戸で可愛い女と死んで行つたと言つて下され」と、満足の内に死んでいく。また弥生も、左膳の名を呼びつつ息を引き取るのであった。

栄三郎に手紙を返しにやって来た大岡越前守は、役儀により開封した手紙の内容について、不問の態度を示すのであった。左膳の手紙で委細承知した栄三郎は、乾坤二刀を帰参の土産とし、お艶の亡父の家名を継いで相馬へ行く決心をするのであった。鈴川源十郎と榎巻お藤は召し捕られた。臨終間際の左膳の体に捕縄がうたれんとしたその時、越前守は慈悲をもってそれを制止するのであった。

鳥江版丹下左膳の台詞には、主君に対する不敬な態度が現れている。第一幕「法恩寺前鈴川源十郎屋敷の場」で、源十郎に正体を打ち明ける際、主君相馬大膳亮のことを「天下にかくれない名刀と云ふ名刀はみんな自分の手許に集めやうと云ふとんでもない見だ」と述べ、更には、小野塚鉄斎からは是非にも乾雲坤龍を奪い取ろうと企む主君の様を「凡夫の意地」とまで評している。鳥江版の丹下左膳は忠臣では無い。彼にとっては、君命よりも小野塚弥生の方が大切なのである。鳥江鉄也は弥生に身投げを図らせて、丹下左膳と強引に結びつけた。弥生の身投げ未遂は、舞台上で実際に演じられる訳ではなく、第二幕「上野穴稻荷初午祭りの場」において丹下左膳の台詞によって解説される。

病に罹り先も知れない身体の弥生は、自分の存在がお艶を苦しめると考え、自ら命を断とうとする。大川へ身投げを図ったその時、彼女を救った人間が父の仇であったことから、弥生の苦悩は深まるのである。そして、敵に身を許した不孝を嘆く弥生の姿に、丹下左膳もまた苦しんだことであろう。彼は秘密裏に、諏訪栄三郎に討たれる計画を固めていく。鳥江鉄也は左膳と弥生を、死ぬことによって苦しみから解放される心

中者のような、禁断の間柄として描いた。林不忘の原作で、左膳と弥生の絡みがほぼ無いだけに、意表を突く展開であったと言える。

ここまで食満版、鳥江版の丹下左膳の最期を見て来た。両脚本はそれぞれ異なる方向へ物語を広げ芝居としての結末を作り上げたが、共通する部分も存在した。それは原作冒頭で林不忘が張った伏線の回収である。すなわち、丹下左膳の主君と当り矢お艶の亡父和田宗右衛門の主君が同一であるという伏線だ。この伏線を回収すると、乾雲丸坤龍丸を相馬の殿へ献上するのは丹下左膳ではなく、お艶の恋人諏訪栄三郎になる。つまり、栄三郎が和田宗右衛門の跡を継げば、刀を手柄に相馬へ帰参が叶うという筋が最初から組まれているのだ。

乾雲丸坤龍丸を栄三郎の手柄にする為には、どうしても左膳を消さなければならぬ。食満版、鳥江版が丹下左膳を死なせたのは、物語の筋として妥当な行いなのである。

### 五、映画・小説に見られる舞台の影響

舞台「新版大岡政談」では、前章で述べたように二通りの展開が示された。丹下左膳の物語がどの様な結末を迎えるのか、原作者にしか解らないその先の展開を、劇作家たちは大胆に創作した。また原作者もそれらについて批判的ではなく、懐の深さを示した。

では、本稿が問題としている伊藤大輔監督の映画「新版大岡政談 解決篇」では、どのような経緯で丹下左膳が死ぬのか、特に食満版の筋立ちを思い返しながら見て行きたい。「新版大岡政談 解決篇」の梗概は、映画プログラム(図1)から確認できる。

梗概末尾の「大岡越前の究問に窮して襲封六万石と我身大事の利欲か



図1 『名古屋金輝館 映画プログラム』(昭和三年九月十九日発行)

ら丹下左膳は家臣にあらずとの相馬大膳亮の卑怯に」という部分に注目してほしい。相馬大膳亮は大岡越前守に何事かを糾問され、丹下左膳を家臣では無いと述べるのである。これは食満版第四幕の「將軍吉宗の居間の場」で起きた出来事と同じではないか。梶田章『大河内伝次郎人と作品・その魅力のすべて』(平成四年九月三十日発行朝日ソノラマ)で

は、「新版大岡政談 解決篇」の映画説明レコードを文章化している。そこから大岡越前守と相馬大膳亮のやり取りを確認する。

急のお召しに相馬大膳亮は参内し將軍吉宗公の御前。大岡越前守は、「相馬公、近時丹下左膳なるもの、相馬公の秘命と称して刀劍争奪の禍乱を事とし言語道断の行状。もとより相馬公はかかる不逞の浪人輩に秘命を下さるるが如きこと万々これあるべしとは存じませぬが——」

吉宗「越前、控えい！ 思うてもみよ、かような事あれば襲封相馬六万石に障りなくてはおさまらぬこと。相馬公、かかわり合いはござるまいの——」

大膳亮「ははッ——」

吉宗「越前、相馬公は存ぜぬことじゃ」

「その儀、親しく上様の御前において承わる上は、越前これより大安心をもちまして一網打尽、丹下左膳一味の掃滅にあたりまする」  
〔『大河内伝次郎人と作品・その魅力のすべて』三二〇頁〜三二二頁〕

このように相馬大膳亮は、將軍に呼び出され、大岡越前守の追及を受けて、丹下左膳との関係を否定したのである。これはまさに、食満版「將軍吉宗の居間の場」と同じ状況である。

日活映画「新版大岡政談 解決篇」は、さらにその帰り道での様子も描いた。説明レコードの続きの部分を読むと、

まもなく下城してゆく相馬公の駕籠。一切を知って悲痛に見送り考

え沈んでおりました左膳、

「主命に殉じ先立ち逝きし詫間よ、佐久よ。又、月輪の同門よ。御身たちは誰のために働き何のために死んだのだったか。御身たちの忠勤は泥土に委せられ、その尽忠は塵芥だに値いせぬものとなり果たた。所領安堵の一念から我が身可愛の一心から、我等は家臣にあらずと仰せられた。おめでたいぞよ、丹下左膳。その主を信じ、その信を信じ一命これに殉ぜんとした貴様も余っ程大馬鹿者だ！  
(狂笑) うむ、よし！」

〔『大河内伝次郎人と作品・その魅力のすべて』三二二頁〕

とあり、下城していく相馬大膳亮の駕籠を見送る丹下左膳の胸中を語っている。レコードには、丹下左膳が主君の乗物に声を掛ける場面の説明が収録されていないが、「我等は家臣にあらずと仰せられた」という台詞から、この時既に丹下左膳は主君と面会した後である事が分かる。左膳は大膳亮から馘首を言い渡され、その理不尽な言葉に衝撃を受けて、主君の駕籠を見送っているのである。丹下左膳が主君に引導を渡されるこの場面が、食満版第四幕の「城外濠端の場」をベースにしていることは最早改めて言うまでも無いだろう。

食満版と伊藤監督の筋立ての大きな違いは大膳亮の態度である。食満版では大膳亮が、江戸城内での出来事を全て丹下左膳に説明している。今後のことに関しても、状況を理解した丹下左膳の側から主家との関係を断つ素振を見せている。それに対して伊藤監督の「解決篇」では、身の危険を感じた大膳亮が、藪から棒に丹下左膳を馘首するのである。この主君大膳亮の横暴な態度こそが、その先の展開を食満版と全く異なる筋にするポイントであった。

映画プログラムの梗概の通り、主君の態度に激怒した左膳は、夜泣きの刀奪取の任で死んでいった同輩の無念を晴らすべく、(刀剣奪取の前任者が居たというのは、原作には無い設定である。)命賭けで乾雲丸坤龍丸を手に入れることを決意するのである。がむしゃらに暴れ回り、乾坤二刀を手に入れた丹下左膳は、捕方役人の重囲の中で立ち腹を切って自害する。これが、伊藤版の丹下左膳最期の姿である。

この「解決篇」での丹下左膳の扱い方こそが、日活映画「新版大岡政談」をヒットさせた要因であると言われている。藤井康生「映像の中の芸能(三十一)『丹下左膳』(『上方芸能(一七六号)』平成二十二年六月十日発行 上方芸能編集部 八十七頁〜九十二頁)では、「伊藤大輔の『新版大岡政談』が成功したのは、大河内の熱演もさることながら、その脚色に要因があった。——中略——伊藤大輔は自由に脚色し、左膳が主君から見捨てられる有名な場面も彼の創作である」と述べている。

これまでの映画評論では、左膳が主君に裏切られる場面は、伊藤大輔監督の創作であるとされてきた。しかし、その場面の下地には食満版「将軍吉宗の居間の場」と「城外濠端の場」が用いられていたのである。

食満南北の「新版大岡政談」は大阪の角座に続き、昭和三年三月一日から三月十八日に京都座でも上演されている。大阪で中々の人気を博したその芝居が、京都で掛ったとあれば、「新版大岡政談」の製作準備中であつた伊藤大輔監督が意識しないとは考えにくい。伊藤監督自身、この映画の打ち明け話としてインタビューで次の様に語っている。「あの原作(林不忘氏作)では、丹下左膳は死んでいない。終わりは召し捕られてもいないんです。——中略——初めから私は、こいつ、領主に見捨てさせて、殺してやろうと考えた」(伊藤大輔『時代劇映画の詩と真実』昭和五十一年四月十四日発行 キネマ旬報社 八十三頁)そもそも、見捨

てさせて殺すという発想自体が舞台の影響なのである。

食満版に見られる忠義一途な丹下左膳の姿は、伊藤版へと引き継がれた。反逆の精神を描かせると右に出る者がいないと謳われる伊藤監督は、この忠臣左膳をいたましい反逆者に仕立てる為に相馬大膳亮に手を加え、物語の路線を切り替えたのである。忠臣であるがゆえに、主君に捨てられた時の悲壮感是一段と際立つのである。

さて、伊藤監督の脚色した丹下左膳の最期には、もう一つ気になる場面が存在する。男装し、小野塚伊織と名乗って左膳を狙っていた小野塚弥生は、手先に雇った手裏剣の名手山椒の豆太郎に女であることを看破されて襲われる。そこへ乾雲坤龍を手に入れた丹下左膳が駆け付ける。説明レコードの該当部位を引用すると以下の通りである。

左膳の悲望ついに空しからず、乾坤両刀を手に入れることができなくなったとき、豆太郎の無体の恋慕に瀕死の重傷を負わされて倒れている弥生を見ました。

「弥生どの！ 弥生どの！」

弥生は左膳を父の仇と見分ける力もなく、哀れはかなく死んでゆきます。捕手の人数は増してくる。左膳もまた最期を知って切腹しました。

苦しい息の中から悲痛の叫びが聞こえてくる。  
「先立ち逝きし我等が同志よ。左膳もこれより参りますぞ。乾坤両刀を携えて花嫁御寮の手を引いて——」

(梶田章『大河内伝次郎人と作品・その魅力のすべて』三三四頁)

伊藤版の左膳が残す「花嫁御寮の手を引いて」という台詞には、悲壮



『旧劇 大岡政談 二幕五場』とある。奥付はなく、製作者及び筆写時期など不明である。（※以降、大谷図書館所蔵の筆写本を『大谷脚本』、雑誌『道頓堀』掲載脚本を『雑誌掲載版』と表記する。）

大谷図書館のデータベースでは、この脚本の位置づけを「昭和三年二月浪花座上演」としている。しかし、浪花座「新版大岡政談」の上演脚本である『雑誌掲載版』と読み比べを行ったところ、二つの脚本には違いが存在した。『大谷脚本』と『雑誌掲載版』とで、役名が付く登場人物の人数を数えると『大谷脚本』は十二名、『雑誌掲載版』は十名なのである。『大谷脚本』のみにもみられる「御家人土生仙之助」と「鈴川の雇婆おさよ」の役名は、昭和三年二月浪花座興行筋書（早稲田大学演劇博物館所蔵）を確認しても見あたらない。この二人は浪花座上演時には登場していないのである。よって『大谷脚本』は、浪花座の上演脚本では無いといえる。

鳥江版「新版大岡政談」は東京でも上演されている為、『大谷脚本』が東京上演時の脚本である可能性も考えた。しかし、ある理由からそうではないといえる。昭和三年七月初日の浅草公園昭和座興行、昭和四年一月十四日初日の本所緑町寿座興行について、国立劇場所蔵の当該筋書を確認した。すると、昭和座、寿座の上演時には初演時と異なる場が増設され、全六場に再構成されていたことが分かった。具体的には浪花座上演時の第一幕第一場に当たる「法恩寺前鈴川源十郎屋敷の場」の前に、「小野塚鉄斎道場の場」が加わっている。「小野塚鉄斎道場の場」が存在しない『大谷脚本』は、東京での上演時に使用された脚本では無いと言いきることができる。これらのことから本稿は、『大谷脚本』が『雑誌掲載版』の準備段階の稿であると考えられる。

『大谷脚本』と『雑誌掲載版』とを比較すると、登場人物の統合や削

除が見てとれる。『大谷脚本』に見られる御家人土生仙之助の役割は、『雑誌掲載版』では、つゞみの与吉の役割の内に統合されている。また、『大谷脚本』第一幕の「法恩寺前鈴川源十郎屋敷の場」で、丹下左膳の秘密を知った為に殺される雇婆おさよの役割は、『雑誌掲載版』では削られている。このような役の統合、削除の他にも、台詞や行動の修正が随所に確認できる。準備稿と決定稿を読み比べることで、脚色者がどの様な点に注意を払い筋立てを変更したのかが見えてくる。今後は更に緻密な比較作業が課題である。

ここまで鳥江鉄也の脚本について述べてきたが、鳥江鉄也脚色の「新版大岡政談」にはもう一つ、「鈴川源十郎最終篇」と題する別の作品が存在する。この「最終篇」は、関西新派の都築文男一派によって上演された。（※上演記録は巻末の「資料二―⑤」《舞台上演記録》【都築】の項を参照。）大阪毎日新聞（昭和三年五月十二日付夕刊二面）掲載の天満八千代座の広告には、「鳥江鉄也氏新脚色」の文言がみとれる。原作の進行に伴い、改めて脚色をし直したのであるうか。国立劇場所蔵の絵入番付（昭和三年五月二十三日初日 京都座）によると「鈴川源十郎最終篇」の場割は以下の通りである。

〔場割〕

- 第一幕 (一) 大岡越前守役宅奥庭
- (二) 同家 門外
- (三) 本所鈴川源十郎屋敷
- (四) 法恩寺橋の橋畔
- 第二幕 (一) 小金井橋の茶屋
- (二) 二本松旅人宿柳屋
- (三) 奥州中村城相馬大膳亮居間

(四) 常陸国鞍川の溪流

第三幕 (一) 深川富岡八幡宮の境内

(二) 深川料亭松本の二階

(三) 八幡宮社殿の裏側

これだけを見ても、浪花座上演時の鳥江版とはまったく趣の違う、まさに「新脚色」であることが分かる。「最終篇」を名乗ってはいるが、浪花座で上演した二幕五場の作品とは関連性が無いようだ。

さらに、京都座番付には興味深い記述がある。絵入の芝居番付なので、中央に芝居の印象的な場面の絵、下部に登場人物名などの詳細情報が列記されているのであるが、中央の絵に書き添えられた脚色者の名前と、番付下部の登場人物欄に、記された脚色者の名前が異なるのだ。絵の脇には「鳥江鉄也氏脚色」とあるが、登場人物欄の脇には「深草露二氏脚色」と記されている。この芝居は果たして、鳥江鉄也の脚色であるのか、それとも深草露二という人物によるものであるのか、もしくは共作であるのか、現段階では謎に包まれている。「鈴川源十郎最終篇」に関しては更なる調査が必要である。

## 七、おわりに

本稿は丹下左膳の「最期」に着目し、舞台「新版大岡政談」が、映画「新版大岡政談」に与えた影響を考察してきた。舞台「新版大岡政談」は原作連載中の舞台化であったため、物語の結末、左膳のその後は劇作家たちの手に委ねられた。それによって生じたのが食満版と鳥江版、二通りの展開であった。そして『新版大岡政談』が映画化された際、日活映画「新版大岡政談 解決篇」に、食満版の四幕目がベースとして用い

られたのである。

『新版大岡政談』の舞台化は、後に続く映画化作品に脚色の指針を示す重要な存在であった。どこまで原作に従い、どこまで潤色が許容されるのかを舞台が前例となり、大胆な創作で示したのである。また舞台作は映画化作品に影響を与えただけではなく、原作にさえインスピレーションを与えた可能性があるのだ。

今後は六章に示した通り、鳥江版の脚本二種の比較研究と、鳥江鉄也脚色とされる「鈴川源十郎最終篇」の調査が課題となるだろう。

## 《資料篇》

(一) 『新版大岡政談』人物相関図(図2)参照

(二) 連続時代劇の原作情報及び舞台上演記録

※原作連載中、ないしは連載後直ぐに製作された映画化作品、舞台化作品のみを拾い出した。調査対象は大阪、京都、神戸、東京の四つの地域とした。また、舞台化情報に関しては現段階での調査結果である。

① 修羅八荒(しゅらはつくわう)

【原作者】 行友李風作・伊藤彦造画

【正式題名】 大阪朝日『修羅八荒』・東京朝日『新講談 修羅八荒』(全二五〇回)

【連載紙】 大阪朝日新聞(夕刊)・東京朝日新聞(夕刊)

【連載期間】 大正十四年(一九二五)十月二十七日付〜大正十五年(一九二六)八月十三日付

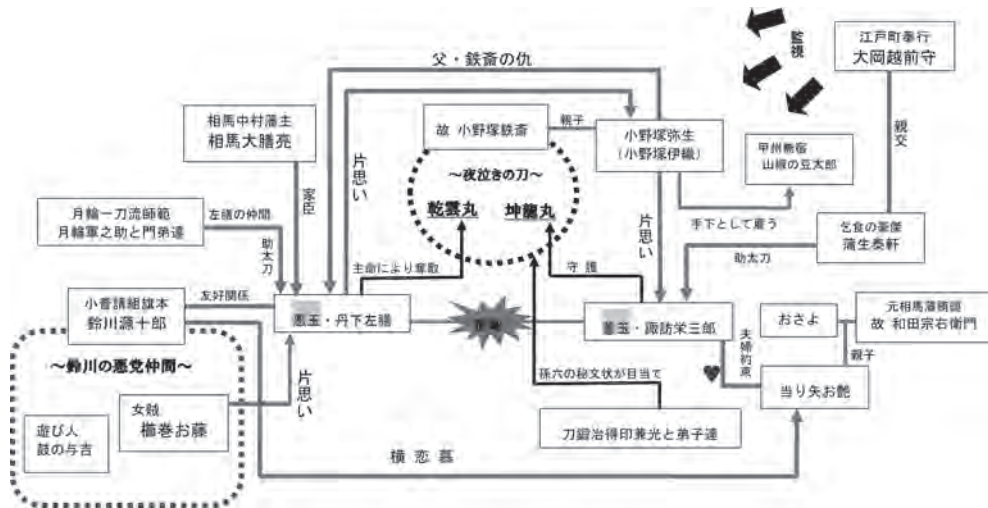


図2 《資料篇》(一)『新編大岡政談』人物相関図

《映画封切日》※1

- 【松竹キネマ】第一篇 大正十五年二月十四日(浅草松竹館)
  - 【松竹キネマ】第二・三篇 大正十五年四月一日(浅草松竹館)
  - 【松竹キネマ】終篇 大正十五年八月八日(帝京座)
  - 【日活】第一篇 大正十五年二月十四日(浅草富士館)
  - 【日活】第二篇 大正十五年二月二十四日(浅草富士館)
  - 【日活】第三篇 大正十五年四月十五日(大阪常盤座)
  - 【日活】第四篇 大正十五年六月八日(浅草富士館)
  - 【日活】第五篇 大正十五年七月三十日(浅草富士館)
  - 【日活】終篇 大正十五年八月二十九日(浅草富士館)
  - 【マキノプロ】第一篇 大正十五年二月十五日(京都マキノキネマ)
  - 【マキノプロ】第二篇 大正十五年二月二十八日(京都マキノキネマ)
  - 【マキノプロ】第三篇 大正十五年四月二十一日(京都マキノキネマ)
  - 【マキノプロ】解決篇 大正十五年八月三十一日(京都マキノキネマ)
- 《舞台上演記録》
- 【新声劇】浪花座「第一篇 修羅八荒 京・大阪の巻(五幕十一場)」  
大正十五年四月一日〜四月十五日※2
  - 【新声劇】浪花座「第二篇 修羅八荒 江戸の巻(五幕九場)」  
大正十五年四月十八日〜四月二十七日※2
  - 【新声劇】浪花座「第三篇 修羅八荒 武蔵野の巻(五幕九場)」  
大正十五年五月一日〜五月十日※2
  - 【新声劇】神戸松竹劇場「前篇 修羅八荒」  
大正十五年五月二十九日〜六月六日※3
  - 【新声劇】神戸松竹劇場「後篇 修羅八荒」  
大正十五年六月八日〜六月十四日※3



【新声劇】京都座「前編 修羅八荒 京・大阪の巻（五幕十場）」

大正十五年六月十八日～六月二十八日※4

【新声劇】京都座「後篇 修羅八荒 江戸の巻（五幕十場）」

大正十五年六月三十日～七月十一日※4

【新声劇】浅草公園松竹座「修羅八荒 京阪の巻（五幕十場）」

大正十五年七月三十日初日※5

## ② 孔雀の光（くじゃくのひかり）

【原作者】前田曙山作・金森観陽画

【正式題名】『情炎秘史 孔雀の光』（全二一〇回）

【連載紙】大阪毎日新聞（夕刊）

【連載期間】大正十四年十二月十日付～大正十五年八月十日付

## 《映画封切日》※1

【帝国キネマ】第一篇 大正十五年二月十四日（大阪芦辺劇場）

【帝国キネマ】第二篇 大正十五年三月十四日（大阪芦辺劇場）

【帝国キネマ】第三篇 大正十五年三月二十八日（大阪芦辺劇場）

【帝国キネマ】終篇 大正十五年八月十九日（大阪芦辺劇場）

【マキノプロ】第一篇 大正十五年二月二十一日（京都マキノキネマ）

【マキノプロ】第二篇 大正十五年三月十四日（京都マキノキネマ）

【マキノプロ】第三篇 大正十五年四月二十九日（京都マキノキネマ）

【日活】第一篇 大正十五年三月五日（大阪常盤座）

【日活】第二篇 大正十五年三月二十日（浅草富士館）

【松竹キネマ】第一・二篇 大正十五年三月六日（浅草松竹館）※6

【松竹キネマ】第三・四・五篇 大正十五年四月三十日（浅草松竹館）

【松竹キネマ】第六篇 大正十五年五月十四日（浅草松竹館）※6

## 《舞台上演記録》

【同志劇一派】夷谷座「情炎秘史 孔雀の光（五幕七場）」

大正十五年四月一日～四月八日※4

【歌舞伎】松島八千代座（嵐徳三郎・嵐和歌太夫等）

「前編 孔雀の光（幕なし十三場）」

大正十五年四月二十九日初日※2

【新旧合同劇】角座（阪東寿三郎・藤村秀夫・浅尾大吉・花柳章太郎等）

「情炎秘史 孔雀の光（五幕）」大正十五年五月三日～

五月十六日※2

【新旧合同劇】神戸松竹劇場（阪東寿三郎・藤村秀夫・浅尾大吉・

花柳章太郎等）

「孔雀の光（五幕）」大正十五年六月二十日（※7）

六月二十七日（※8）

## ③ 鳴門秘帖（なるとひでう）

【原作者】吉川英治作・岩田専太郎画

【正式題名】『鳴門秘帖』（全三五四回）

【連載紙】大阪毎日新聞（夕刊）

【連載期間】大正十五年八月十一日付～昭和二年（一九二七）

十月十四日付

## 《映画封切日》※1

【日活】第一篇 大正十五年十月三十一日（大阪常盤座）

【日活】第二篇 大正十五年十二月二日（京都帝国館）

【日活】第三篇 昭和二年二月九日（大阪常盤座）

【日活】第四篇 昭和二年五月二十七日（大阪常盤座）

【日活】第五篇 昭和二年六月三日（大阪常盤座）

【日活】第六篇 昭和二年八月五日（大阪常盤座）

【日活】最終篇 昭和二年九月十五日（大阪常盤座）

【マキノプロ】第一篇 大正十五年十一月七日（京都マキノキネマ）

【マキノプロ】第二篇 大正十五年十一月二十一日（浅草千代田館）

【マキノプロ】第三篇 昭和二年二月六日（浅草千代田館）

【マキノプロ】第四篇 昭和二年五月二十七日（浅草千代田館）

【マキノプロ】第五篇 昭和二年六月三日（浅草千代田館）

【マキノプロ】第六篇 昭和二年七月十四日（浅草千代田館）

【マキノプロ】最終篇 昭和二年九月十五日（浅草千代田館）

【東亜キネマ】第一篇 大正十五年十一月十一日（大阪パーク劇場）

【東亜キネマ】第二篇 大正十五年十二月一日（京都富士館）

【東亜キネマ】第三篇 昭和二年二月九日（大阪パーク劇場）

【東亜キネマ】第四篇 昭和二年四月二十九日（大阪パーク劇場）

【東亜キネマ】第五篇 昭和二年六月一日（大阪パーク劇場）

【東亜キネマ】第六篇 昭和二年七月三十一日（大阪パーク劇場）

【東亜キネマ】最終篇 昭和二年十月二十七日（大阪パーク劇場）

《舞台上演記録》

【あかつき座】松島八千代座「鳴門秘帖（前篇八場）」

大正十五年九月二十七日～十月七日※2

【新声劇】浪花座「鳴門秘帖（五幕十場）」

大正十五年十月三十日～十一月十六日※2

【新潮座】京都座「鳴門秘帖（全五幕十二場）」

大正十五年十月三十一日～十一月十五日※4

【あかつき座】天満八千代座「鳴門秘帖（五場）」

大正十五年十一月十一日初日※2

【明石潮一座】浅草公園常盤座「鳴門秘帖（全十二場）」

昭和元年（一九二六）十二月三十一日初日※9

④砂絵呪縛（すなゑしばり）

【原作者】土師清二作・富田千秋画

【正式題名】大阪朝日『砂絵呪縛』・

東京朝日『長篇砂絵呪縛』（全一七五回）

【連載紙】大阪朝日新聞（夕刊）、東京朝日新聞（夕刊）

【連載期間】昭和二年六月十一日付～十二月三十日付（大朝）、六月十日付～十二月三十一日付（東朝）

《映画封切日》※1

【日活】第一篇 昭和二年九月八日（観音劇場）

【日活】第二篇 昭和二年十一月三日（観音劇場）

【日活】終篇 昭和二年十二月十五日（大阪常盤座）

【マキノプロ】第一篇 昭和二年九月八日（浅草千代田館）

【マキノプロ】第二篇 昭和二年十一月三日（浅草千代田館）

【マキノプロ】終篇 昭和二年十二月十五日（浅草千代田館）

【東亜キネマ】第一篇 昭和二年九月八日（大阪パーク劇場）

【東亜キネマ】第二篇 昭和二年十一月四日（大阪パーク劇場）

【東亜キネマ】終篇 昭和二年十二月十五日（大阪繁栄座）

【阪妻プロ】第一篇 昭和二年九月八日（電気館）

【阪妻プロ】第二篇 昭和二年十一月三日（電気館）

【阪妻プロ】終篇 昭和二年十二月十五日（電気館）

《舞台上演記録》

【新派劇】浅草公園劇場（河合武雄・喜多村緑郎・伊井蓉峰 大合同）

「初篇 砂絵呪縛（無幕五場）」昭和二年十月一日初日※10

【松竹新劇団】浅草松竹座「砂絵呪縛（三幕）」

昭和二年十月一日初日※11

【松竹新劇団】浅草松竹座「続篇 砂絵呪縛（四幕）」

昭和二年十月十五日初日※12

【新派劇】浪花座（河合武雄・喜多村緑郎・伊井蓉峰 大合同）

「初編 砂絵呪縛（五場）」

昭和二年十一月一日〜十一月二十六日※2

⑤新版大岡政談（しんぱんおほをかせいだん）

【原作者】林不忘作・小田富弥画

【正式題名】『新版大岡政談鈴川源十郎』（全一九七回）

【連載紙】大阪毎日新聞（夕刊）

【連載期間】昭和二年十月十五日付〜昭和三年（一九二八）

五月三十一日付

《映画封切日》※1

【東亜キネマ】第一篇 昭和三年五月六日（大阪パーク劇場）

【東亜キネマ】第二・三篇 昭和三年五月三十一日（大阪パーク劇場）

【東亜キネマ】終篇 昭和三年七月十四日（大阪パーク劇場）

【マキノプロ】前篇 昭和三年五月六日（京都マキノキネマ）

【マキノプロ】中篇 昭和三年五月十三日（京都マキノキネマ）

【日活】第一篇 昭和三年五月三十一日（浅草富士館）

【日活】第二篇 昭和三年六月八日（浅草富士館）

【日活】解決篇 昭和三年八月十七日（浅草富士館）

《舞台上演記録》

【新声劇】角座「新版大岡政談鈴川源十郎の巻（五幕十三場）」

昭和三年二月一日〜二月二十日※13

【歌舞伎】浪花座（片岡我童・阪東寿三郎・中村福助等）

「大岡政談 鈴川源十郎の巻（二幕）」

昭和三年二月三日〜二月二十四日※13

【新声劇】京都座「新版大岡政談 鈴川源十郎の巻（全五幕十三場）」

昭和三年三月一日〜三月十八日※4

【新声劇】神戸八千代座「大岡政談の内鈴川源十郎の巻（五幕十三場）」

昭和三年四月一日（※14）〜四月八日（※15）

【都築文男一派】天満八千代座

「続新版大岡政談 鈴川源十郎最終篇（十一場）」

昭和三年五月十二日初日※16

【都築文男一派】京都座「新版大岡政談 鈴川源十郎最終篇

（全三幕十一場）」

昭和三年五月二十三日〜五月三十日※4

【尾上多見太郎・酒井淳之助・大谷友三郎 合同劇】

浅草公園昭和座「大岡政談 鈴川源十郎の巻（六場）」

昭和三年七月三日（※17）〜七月十三日（※18）

【歌舞伎】本所緑町寿座（坂東大吉・市川鶴之輔・市川新之助等）

「新版大岡政談 丹下左膳（六場）」

昭和四年（一九二九）一月十四日（※19）

一月二十五日（※20）

《典拠》

※1 封切情報は一部を除き『キネマ旬報』各号の「各地主要常設



昭和4年		昭和3年(1928)																															
1月		8月		7月				6月				5月																					
25	14	17	11	21	14	13	11	11	3	2	22	12	11	8	31	31	31	31	30	30	30	23	22	20	13	12	12	6					
舞台	舞台	映画	映画	映画	映画	舞台	映画	映画	舞台	映画	映画	映画	映画	映画	映画	映画	映画	原作	舞台	映画	映画	舞台	映画	映画	映画	映画	映画	映画	映画				
歌舞伎	歌舞伎	日活映画	日活映画	日活映画	東亜映画	合同劇	東亜映画	日活映画	合同劇	東亜映画	日活映画	日活映画	月形プロ	日活映画	東亜映画	日活映画	日活映画	大阪毎日新聞	都築一派	月形プロ	東亜映画	都築一派	都築一派	マキノプロ	日活映画	マキノプロ	日活映画	日活映画	マキノプロ				
	鳥江鉄也脚色「新版大岡政談」丹下左膳(六場)「寿座興行最終日		「新版大岡政談」解決篇」封切		「新版大岡政談」最終篇」封切		鳥江鉄也脚色「大岡政談」鈴川源十郎の巻(六場)「昭和座興行最終日		鳥江鉄也脚色「大岡政談」鈴川源十郎の巻(六場)「昭和座興行初日		伊藤大輔氏は「新版四谷怪談」を七月七日完成と共に上京中であつたが、十日帰洛し「新・大」(終篇)の準備に着手した。(302)		伊藤大輔氏は目下自宅に引きこもり「新・大」(第三篇)を脚色中。脱稿次第撮影を開始するはず。(299)		井上金太郎氏はマキノ委嘱の「新・大」(続篇)製作予定であつたが、時期を失つた為中止することになつた。(299)		「新版大岡政談」第二篇」封切		「新版大岡政談」第二、三篇」封切		「新版大岡政談」第一篇」封切		「新版大岡政談」第一篇」封切		「新版大岡政談」第一篇」封切		伊藤大輔氏は「新・大」(第二篇)を五月三十一日に完成。第三篇の脚色に着手。(298)		伊藤大輔氏は「新・大」(第一、二篇)を完成させ、目下第二篇を監督中。(297)		伊藤大輔氏は「新・大」の監督を再開、中旬には第一篇を完成し、月末には第二篇完成予定。(296)		「新版大岡政談」前篇」封切

(三) 『新版大岡政談』年表(「表一」参照)

※各社の映画製作状況は、『キネマ旬報』定例記事「日本各社撮影所通信」に拠る。年表の日付は、「日本各社撮影所通信」に記載されている調査日とした。内容欄の( )内に記した番号が該当する『キネマ旬報』の号数である。

(1) 新声劇は、主に関西地方で活躍した松竹所属の劇団である。松竹大谷図書館所蔵の辻番付によると、大正八年(一九一九)九月三十日初日の弁天座での興行で旗揚公演をしている。結成当初は新派の色合いの強い団体であつたが、構成員の変動により剣劇に力を入れる一座へと変化した。構成員の変動については、大井広介『ちゃんばら芸術史』(昭和三十四年三月五日発行 実業之日本社)の「剣劇華かなりし頃」の項を参照されたい。

新声劇は、関東大震災直前の大正十二年(一九二三)七月末に上京し浅草観音劇場で公演をしている。七月三十一日から「社会劇 勝鬨(一幕)」に「維新奇傑 坂本龍馬(六場)」を上演し、八月十日から十九日まで二の替りとして「大塩平八郎(五幕七場)」を上演している。都新聞(大正十二年八月三日付 七面)によると「立廻りは随分激しい」と評されており、同三日に初日を迎えた浅草公園劇場の新国劇一座とどう比較されたかが気になる所である。

(2) 『典拠』  
・早稲田大学演劇博物館所蔵辻番付(昭和三年二月初日角座)  
・『道頓堀(第三年第十七集)』(昭和三年二月一日発行 松竹合名社五十七頁)

(3) 坪内士行「中堅諸優の浪花座劇」『舞台評論』第八十四号 昭和三年四月十五日発行大阪演劇連盟出版部 四十八頁)では食満南北のことを以下のように評している。

今関西劇界の座付役者の雄なる者はと見れば、勿論非凡の士多々あるが、まづ大森痴雪氏と食満南北氏の二人に屈せねばなるまい。——中略——此の両氏の如きは、東都の綺堂(※引用者註、岡本綺堂のこと)、松翁(※引用者註、松居松翁のこと)、鬼太郎(※引用者註、岡鬼太郎のこと)、薫(※引用者註、小山内薫のこと)の諸氏に比肩して些の遜色も無いと信ずる。

(4) 関西劇作家の重鎮であることが伝わってくる。  
田中照禾「資料による丹下左膳の研究第五卷 演劇・ドラマ篇」『資料による丹下左膳の研究』私家版 平成二十四年)にみる食満南北脚本影印は表紙と本紙一八四丁からなる。二丁ウラから三丁ウラにある登場人物名の下部に、主要配役の名字のみの

書き込みが見られる。表紙には以下の情報が見られる。

大阪毎日新聞連載

林 不忘氏原作

食満 南北氏脚色

大岡政談ノ内

鈴木源十郎

全五幕十四場

五幕十四場と記載されているが、中身を確認すると五幕十三場の誤りである。

(5) 《典拠》

・『道頓堀(第三年第十七集)』

・早稲田大学演劇博物館所蔵筋書(昭和三年二月三日初日浪花座)

・大阪時事新報(昭和三年一月三十一日付二面)

(6) 映画説明レコードとは、活動写真弁士(無声映画時代の映画説明者)の名調子を家庭で楽しむための娯楽レコードである。梶田稿は、レコード番号「ヒコキ八五八七・八五八八」の映画説明レコードを典拠としてあげている。『ヒコキレコード総目録(一九三〇)』(昭和五年(一九三〇)合同蓄音器株式会社刊 国立国会図書館所蔵 請求番号・Y2281)を確認したところ、日活映画「新版大岡政談」の映画説明レコード(カタログ表記は「映画説明 大岡政談」となっている)は、以下の三点が存在した。括弧内はカタログ番号である。

「映画説明 大岡政談 前篇」(八四三四/八四三五)

「映画説明 大岡政談 中篇」(八四八四/八四八五)

「映画説明 大岡政談 解決篇」(八五八七/八五八八)

三点はいずれも、神田日活館の弁士谷天郎(たにてんろう)が説明をし、日活和洋合奏団が演奏を行ったものだ。梶田稿が典拠とするレコードは、三つ目の「解決篇」にあたる。また当該レコードは昭和四年三月に新音譜として発売されたことが、都新聞(昭和四年二月二十六日付九面)の広告から判明した。当該レコードは日活映画「新版大岡政談 解決篇」の封切から半年程で発売されたものであり、映画の内容を確認するには有効であると考える。

附記

貴重な資料を拝見させて頂きました松竹大谷図書館、早稲田大学演劇博物館、国立劇場伝統芸能情報館、そして論文発表の場を与えて下さった明星大学の先生方にこの場をお借りし御礼申し上げます。また、中学生の私に『丹下左膳』三冊を贈って下さった叔母に、感謝いたします。